

棟にさしこむ月光を

便りに御經讀み給ふ

吹き入る風は御經を

繰りて讀涌を扶ける

あゝたふとししや大上人

□

嵐はげしき折りくも

霧立ち登る山嶺に

登りて薪ぎ取り給ひ

草露ふかき寒む空に

深澤に下りて芹をつみ

流れも早き山川の

岩瀬に立ちて菜を濯ぐ

死身弘法ぞたふとしや

□

落葉くゝの色深かく

月日は流るゝ水の瀬か

弦をはなれし鎗矢か

こゝに六百五十年

今に傳へて西谷の

御草庵とは申しける

あゝ神境か靈境か？！

此處ぞ大土の栖なれ

□

紅ひに咲く裏山に

紅葉踏み分け啼く鹿の

聲は聞かねど山門の

夜半の嵐に誘われて

月下に立ちし吾れは今

大七のみあと偲びつゝ

杜撰なれども一篇を

草して諸子に見へなん

月の囁き

中林蓮風

塵の子も

今は早や、

尊い嚴かな

眠りの神に護られて、

遠い遠い天國へ

登り行く。

白い月

黒い森、

二人で何やら

囁いて居る。

私はソット

軒端に立つて、

それを聞いて見る。

喃喃といふ

月の囁きに、

森は謹んで

耳を傾けて居たが、

何時の間にやら

スヤスヤと

眠つてしまつた。

月姫は怖として

黒雲に身を包む。

私は急に悲しくなつて、

手に有つて居た

ハーモニカを
ふいて見る。

ホノ明い月の光！

ハーモニカの

傷ましき叫び！

私は恍として

白い静かな宇宙の中へ

茫として消えてしまふ。

身延山偶吟

今古不_レ更本地顔

何須迹化舊年曆

同

本地唱題成ニ本因ニ

定中自不_レ識ニ余在ニ

同

處々猿聲十二時

定心穩坐白雲裡

寂照院日乾上人

唱題穩坐別頭關

山默水談人自聞

正住院日中上人

凡身全是覺皇身

法海圓融往處真

養眞院日住上人

唱題遺_レ世亦忘_レ飢

日暮風清月亦隨